

# お お ぞ ら

No.28・29 (145・146) 合併号

社会福祉法人 聖隷福祉事業団  
総合病院 聖隷三方原病院  
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558  
静岡県浜松市北区三方原町3453  
TEL 053-437-1467

発行責任者 萩野和功  
編集者 横地健治

2011年9月1日

## 日常活動の具体的内容

所長 横地 健治

重症心身障害児(者)がどんな生活を送ったなら、良い生活を送ったといえるのかは重要な問題です。本人が満足感、達成感を感じる活動が生活の中になければならないとの考えは、本通信でも繰り返し述べています。今回は、その具体的内容を考えてみます。

まず、重症心身障害の中で、特に重い障害の人たちについて考えてみます。有意な言語理解がなく、寝返りも自分でできない人たちについてです。この重い障害の人たちにも「括りにはできないほど大きな差異があります。このうち、最も重い障害と

考えられるのは、身体はほとんど動かさず(多くは自発呼吸もない人工呼吸器使用者です)、眼瞼眼球運動がなく、睡眠覚醒の区別も簡単にはできないような人たちです。そのため、内面を想像する手だてはほとんどありません。こうした人たちに提供する活動は、最も根源的なものにならざるをえないと思います。生まれつきの新生児に対し母親がすることを思い描いてみます。目を合わせ、声かけ

をして、触り揺らしています。これは、単純な感覚刺激をしているのではないはずです。愛情を持つたヒトの存在を新生児に提示しているのだと考えます。新生児はやがてこれにほぼえみで応えるでしょう。これが最も根源的な関わりと考えます。睡眠覚醒リズムも不確かな最重度の人たちには、好意を持ったヒトの存在を伝える関わりが最適な活動と考えます。

次に重い障害の人たちは、睡眠覚醒リズムはあり、表情・体動はあるが、日々の生活の中で、何かに注目する、あるいは、注意を高めるといった行動が見られない人たちです。こうした人たちの表出は、痛みなどに対する不快の表出、本能の充足に対する単純な快の表出に限られます。稀には、感情とは無関係に、特定の刺激に対して反射的に笑ってしまう人がいますので(くすぐられて笑うのと似ています)、笑ったからといって、好んでいると安易に判断するのは危険です。こうした人たちにも、まずは、前述の根源的な関わりをするし

の中で、予期せず、何かに注目しているのではないかと思えるそぶりが見られたら、そのことに再現性があるかどうか確認しなければなりません。再現性があれば、次の段階に移ります。

次の段階は、何かに注目することが見られ始めた人たちです。その注目は、まだ外界の何かに対する漠然としたものではなく、音の持つ意味、見えるものの意味、感触に対する意味は本人にもよくわからないが、注意は引かれる段階だと思えます。注意を引くはずだと思われるものを意識的に提供するのがこの段階の活動です。どういう意味で、そのものに注目するかわからないので、的外れのことでも多いはずですが、また、一見違うものに注目したら、その共通性を探っていきます。

次は、ある特定のものに注目することが明らかだが、それはこういう意味があるから注目するのだということが不明確な段階です。この意味は、健常成人の意味の世界と絶対同じではありません。ことばを持つ以前の乳児の意味世界は成人の世界とはかけ離れているはずで、脳障害ゆえに正常発達を停止、あるいは偏った発達をした重症心身障害児(者)の意味世界

は、乳児の世界よりさらに離れています。この段階では、この注目はこういう意味なのだろうと想像してその等価のものを提供します。二回限りの注目を再現性のあるものとするとともに、その意味を明確化していきます。

次は、こういう意味があるから注目するのだというのが明らかになった段階です。本人にとつて、聞こえるもの、見えるもの、触れるものの中で、こういうものを好むと言えるようになってきたということですが、これはまた、以前の好ましい経験を再現できるといふことにもなります。仮に、同じようなことでも、違う時にこの経験を再現できれば、本人にとつて好きなものの意味が明らかになったということですが、そうすれば、本人もその好ましい経験を期待し要求する段階になります。期待や要求には、必ずしもそれを記憶している必要はありません。当を得た活動ならば、その導入とともに期待は高まるはずですが、こうした意味が明らかになった後は、より具体性のある興味・関心に対し活動を広げていきます。そして、達成感・満足感を得られるように展開していきます。